

豪雨の教訓忘れず



103

平年より11日遅れて8月1日、東海地方の梅雨が明けた。7月は観測史上初めて「台風発生ゼロ」だったが、代わって長梅雨の豪雨が列島を水浸しにした。各地で記録的大雨が観測

され、熊本県・球磨川や山形県・最上川などの大河川が氾濫し、流域で大きな水害が発生した。県内では大河川の氾濫はなかったが、各地で土砂崩れや道路の冠水などが発生した。気象庁はこの雨を「令和2年7月豪雨」と命名した。球磨川や最上川の水害を見ると、人間と河川との付

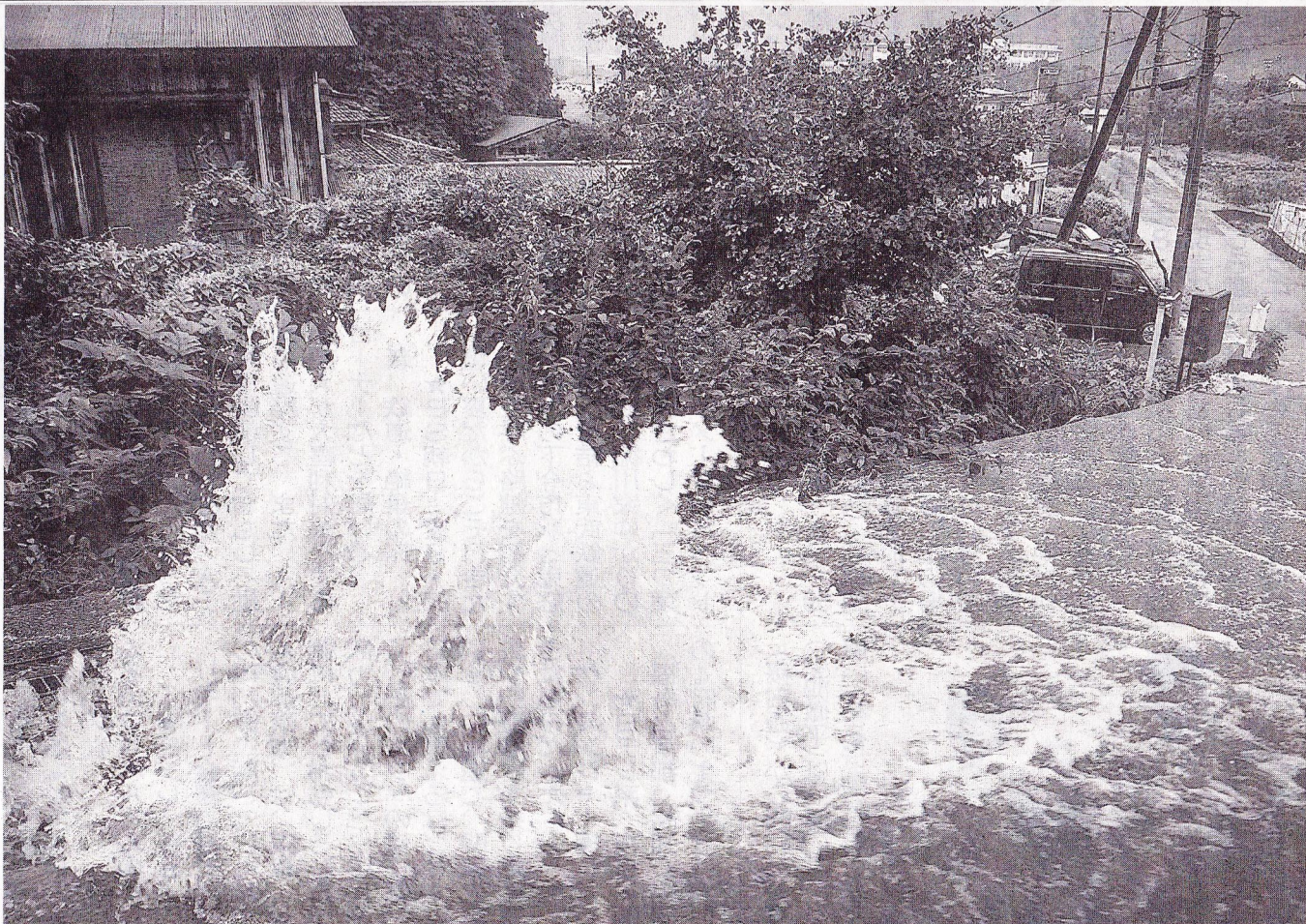
き合い方を考えさせられる。国内の川は河川法に基づき、国管理の1級河川、都道府県管理の2級河川、市町村管理の準用河川に指定されている。県河川砂防管理課によると、県内には1級河川268、2級河川265、準用河川762が流れている。大雨による河川氾濫の危険は県内どこにもあると言っている。

このため県は水害から身を守る避難方法について、個人や家庭ごとに時系列でまとめた事前行動計画表「マイ・タイムライン」の普及を今年度から本格的に進めている。大雨の気象情報、自治体の避難情報、個人(家族)の避難行動など災害時に取るべき行動を、事前に時系列で整理した「行動計画」を手元に準備して置くよう勧めている。モデル地区の藤枝市では河川の水位をAI(人工知能)で予想する実験を始め、「個」の動きに行政の対応を結び付けて、命を守る取り組みを進めている。

気象の激甚化に伴い、ダムや堤防などのハード整備だけでは水害は抑えきれないことを「7月豪雨」は教えてくれた。身の回りの小さな川が氾濫し、突然道路や家屋が浸水する危険があることも分かった。

「災害は忘れた頃にやってくる」とは防災の警句だが、昨今は「いつでも、どこでもやってくる」と思った方がよい。

(前静岡県監査委員・富永久雄)



道路が川に川津町、全日写連・竹之内範明さん撮影